

JLTA Newsletter
日本語テスト学会
The Japan Language Testing Association

JLTA Newsletter No. 19 発行代表者:大友 賢二 2003年(平成15年)8月20日発行
発行所:日本語テスト学会(JLTA)事務局
〒389-0813 長野県埴科郡戸倉町芝原 758 TEL 026-275-1964 FAX 026-275-1970
e-mail: youichi@avis.ne.jp URL: <http://www.avis.ne.jp/~youichi/JLTA.html>



John. B. Carroll 博士のご逝去を悼む

大友賢二(常磐大学・筑波大学)

世界の言語心理学者 John B. Carroll 博士は、2003年7月1日、87歳の生涯を閉じられた。しばらくは、North Carolina の Chapel Hill に博士は住んでおられたが、奥様が2001年の10月に亡くなってからは、ご令嬢の Melissa さん(ロシア語・英語の翻訳者)とそのご主人(アラスカ大学の生物学の教授)の住んでいるアラスカの Fairbanks に移られていた。今年2003年6月に体調を崩され、医者診察を受けて、6月23日手術をしてみると pancreatic cancer(膵臓癌)であることが判明した。お家に帰りたいたいの願いを受け、退院したが、それからたったの8日目で亡くなられた。博士のご遺体は火葬にされ、Massachusetts 州の Southamton の奥様のそばに眠っている。ごく最近まで、博士と接触していたのは、前に Center for Applied Linguistics で仕事をし、その後、Second Language Testing, Inc. で活躍されている Charles Stansfield 氏である。MLAT(Modern Language Aptitude Test)の開発に関して2002年10月30日、45分間の電話インタビューを行い、その後、2003年の3月にもそのまとめのことで博士と電話で話をしている。そのときはまったくお元気であったとのことである。

John B. Carroll 博士の略歴は、言語テストの分野で著名な Bernard Spolsky 編 *Concise Encyclopedia of Educational Linguistics* (Elsevier, 1999) の PEOPLE の欄に詳しく記されている。主な勤務先は Harvard University (1949-1967), Educational Testing Service (1967-74), University of North Carolina (1974-82) である。その著書と活躍は、枚挙にいとまがないが、主なものは、*The Study of Language* (Harvard University Press, 1953), *Language, Thought, and Reality: Selected Writings of B. L. Whorf* (MIT Press, 1956), *The Modern Language Aptitude Test* (with S. Sapon, The Psychological Cooperation, 1959), また、discrete-point and integrative testing などの用語で言語テスト界では見逃せない、“Fundamental Considerations in Testing for English Language Proficiency of Foreign Students” in Center for Applied Linguistics, *Testing the English Proficiency of Foreign Students* (1961)がある。“The Psychology of Language Testing” In Davies, A. (ed.) *Language Testing Symposium*, (OUP, 1968)もきわめて貴重な論文である。

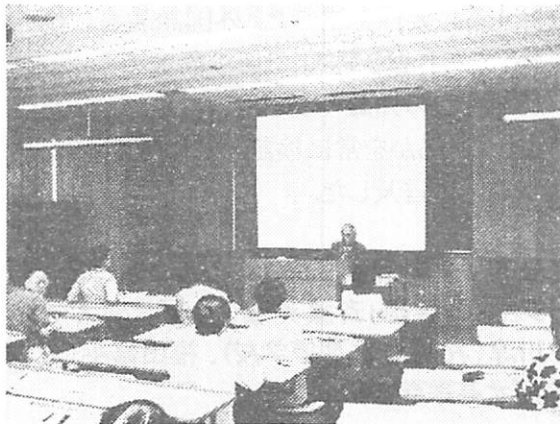
国際性を伴ったテスト開発のお話に加え、本学会の意義を話された。

引き続き2人の先生方からご講演を賜った。

1. 「言語テストの基礎」大友 賢二 (常磐大学)

- 1) 言語能力のモデル
- 2) テストの質と測定準拠
- 3) 言語テストの新しい動き

まず初めに、assessment の定義があり、言語能力のモデルに関しての歴史的な動向の解説があった。そして、現在、言語能力を測る際に考えなければならないテストの質に言及された。言語テストの新しい動きとして、項目応答理論の特徴を古典的テスト理論と対比させながら、わかりやすく講義された。項目応答理論が不変性(invariance)を持つことを強調し、今後のコンピュータテストや絶対評価との重要な関連性を指摘された。



2. 「英語教育における測定と評価の課題」根岸 雅史 (東京外国語大学)

この講義では、主に絶対評価、観点別評価というものを根本から考察しようというものであった。まずは絶対評価の概念について、学校や教員間で定まっていないということを指摘された。また、評価方法が多様になった現在、よりきめ細かく観点別に評価すべきものが最終的に

は総括的なもので示される現状では、学習者へのフィードバックが不完全であることも強調された。このような状況で、本物の絶対評価の実施が可能か、ということが課題であろう。

講義終了後、17:30 よりT棟学生食堂にて懇親会が行われた。お酒が入りながらも、皆様のテストや評価に関する議論が交わされ、今後の言語テストの重要性と本学会の使命を改めて感じさせられた。

(報告者 宮崎 啓 慶應義塾高等学校)

第2日目 7月20日(日)

初日は言語テストの理論と、評価の問題についてであったが、二日目はプラクティカルな面を強調した実習形式のワークショップが行われた。

1. 「テスト項目作成の留意点」Randy Thrasher 先生 (沖縄キリスト教短期大学・国際基督教大学)

テストの目的、つまり construct がテスト項目や妥当性に対してもとても重要であることをわかりやすく説明された。そして、どのようなテスト項目がテストの目的にあったものであるかを、参加者が実習した上で解説された。印象的だったのは、「integrative testing だけでなく、目的に応じて discrete point testing も使うべきであり、Good tests depend on the situation.」というコメントであった。

2. 「テスト項目作成実習」中村優治 (東京経済大学)

良いテスト項目、悪いテスト項目について実例を元にペアワークにて討論がなされた。そしてその後に実際に中村優治先生が大学で行ったスピーキングテストについて、どのような基準を用いて採点するべきかについて実際に参加者が採点し、それに対しての中村優治先生からの提案がなされた。

3. 「テストデータ分析実習」中村洋一 常磐大学

討論・総括

参加者 40 名の内、中学校、高校からの参加者が半数を占め、フロアーから様々な意見が出された。大友会長のミニレクチュアを含めた最後のまとめの挨拶で、言語テスト作成に関わる者としての責任と今後の方向性を再確認できた例会であった。

(報告 竹村雅史 函館工業高等専門学校)

Language Assessment Quarterly: An International Journal (Lawrence Erlbaum) 発刊のお知らせ

Lawrence Erlbaum 社から標記の雑誌が発刊されることになった。詳細は以下の通り。

Editor: Antony John Kunnan (*California State University, Los Angeles*)
Associate Editor: Fred Davidson (*University of Illinois, Urbana-Champaign*)
Nick Saville (*University of Cambridge*)
Carolyn Turner (*McGill University, Montreal*)
Volume 1, 2004, Quarterly (ISSN: 1543-4303) (Online ISSN: 1543-4311)

Editorial Scope: The *Language Assessment Quarterly: An International Journal (LAQ)* is dedicated to the advancement of theory, research, and practice in first, second, and foreign language assessment for school, college and university students; language assessment for employment; and language assessment for immigration and citizenship. LAQ publishes original articles addressing theoretical issues, empirical research, and professional standards and ethics related to language assessment, as well as interdisciplinary articles on related topics, and reports of language test development and testing practice. All articles will be peer-reviewed and will appeal to an international audience. Examples of topic areas appropriate for LAQ include: assessment from around the world at all instructional levels

including specific purpose; assessment for immigration and citizenship and other 'gate-keeping' contexts; issues of validity, reliability, fairness, access, accommodations, administration and legal remedies; assessment in culturally and/or linguistically diverse populations; professional standards and ethical practices for assessment professionals; interdisciplinary interfaces between language assessment and learning; issues related to technology and computer-based assessment; innovative and practical methods and techniques in developing assessment instruments; recent trends in analysis of performance, and issues of social-political and socio-economic concern to assessment professionals.

Audience: The audience includes scholars, professionals, graduate students, school and college ESL and EFL teachers interested in language assessment, practitioners conducting language assessments, educational and governmental education officers, and language education policymakers.

更に詳細については以下を参照のこと。
<http://www.erlbaum.com/journaltitles.htm>

TOEIC リサーチ助成制度 リサーチプロポーザル募集

(財)国際ビジネスコミュニケーション協会では、TOEIC 及び TOEIC Bridge テストに関連した各種リサーチのプロポーザルを募集しています。採用されたプロポーザルには助成金を交付いたします。募集内容及び応募方法についての詳細は、下記 URL へアクセスして下さい。

応募締切 : 10 月 31 日
お問合せ Fax: 03-3581-9801
E-mail: research@toeic.or.jp
詳細情報:

